

渋沢敬三という人物をご存知だろうか。

いや、別の聞き方をしてみよう。渋沢敬三をどういう人物としてご存知だろうか。

経済界での活躍からは、「日本資本主義の父・渋沢栄一の孫」、「第一銀行頭取から日本銀行総裁をつとめた財界人」、「民間から起用された初の大蔵大臣であり戦後日本経済の立て直しに尽力した人物」として近代史に名を残した。

学術界での活動からは、「民具学のパイオニア」、「日本民族学のオルガナイザー」、「戦前における学術界のパトロン」、「日本の民族学博物館のさきがけ」、「文部省史料館建設に尽力した日本アーカイブスの立役者」、「社会経済史研究と漁業制度資料研究の牽引者」などで知られる。

近年の研究では、『渋沢栄一伝記資料』の編纂に代表される「歴史の立会人」としての立ち位置から、地方文書・オーラルヒストリー・映像や写真・博物館資料な

ど、さまざまな形態の資料の記録を残し、整理し、利用に供するために注力した活動、さらに有形民俗文化財の保存や地域博物館、地方史、自治体史へとつながる側面での再評価もある。

しかし、それらすべてが渋沢敬三というひとりの人生のなかで営まれたものであり、側から見れば多岐にわたる分野での活動も、かれのなかでは相互に結びついていたに違いない。本書は、渋沢敬三と戦前にかれが主宰したアチック・ミュージアムにスポットをあて、社会経済史・民俗学・民族学・風俗史などがどのように結びつき、そしてそれらの研究を通じて渋沢敬三が同時代にどのような貢献を果たそうとしたのかについて、紹介する。

アチック・ミュージアムは、渋沢敬三ひとりの問題意識のもとで若者たちに研究をさせるような研究所ではなかった。その活動をみていくとき、同人と呼ばれる面々がそれぞれの志をもって主体的に参画し、相互に共鳴しあいながら研究が確立していったことがみえてくる。昭和一〇年代は、いくつもの研究プロジェクトが同時並行で進められた、まさにアチック・ミュージアムの黄金時代と呼べる時代であったが、そこには一人ひとりの成長のみならず、同世代のそして年代を超えた人

材の相乗効果が絶えず新しい息吹をもたらし続ける、人文学の研究のコミュニティの理想形をみてとれる。渋沢敬三はそうした仲間たちのなかで役割を得ることで、一流のオーガナイザーに成長していったのではなからうか。

渋沢敬三の人生には、社会と対峙する経済人としての仕事と、人文学による歴史や文化の研究とが、コインの表裏としてあった。人文学は、文学や歴史、音楽、宗教、文化、芸術など、人間の心の豊さをためていくような学問である。それゆえ、社会問題に即応して解決策を編み出そうとする社会科学や、具体的な技術によって都市や農村を発展させようとする工学、病気や痛みを平癒させようとする医学とは異なり、いつ役に立つかわからないものでもある。しかし、人は歴史や文化、宗教によってみずからの人生を生きるものであるし、文学や美術、音楽などから人生の意味を感得する。人文学によって得られるものを失ったとき、人は生きる意味を見失うであろう。

その人文学を、渋沢敬三は良き仲間と、良き先輩、良き先生との、人生を通じた豊かな交流によって推し進めた。常に楽しく、疑問を共有し、喜びを分かち合うことで生まれる真つ直ぐな問いと、互いの仕事への敬意は、ストイックなハードワー

クの原動力となった。それは桁はずれな数の民俗誌や史料翻刻、調査報告書に結実し、唯一無二の民具コレクションを遺す結果となった。本書は、渋沢敬三の学問形成と、かれが仲間たちと作り上げた研究のコミュニティ、そして社会をより良くするための人文学からの挑戦と挫折について紹介する。そこから、現代における人文学の意義について考えるヒントを探っていくことができるからである。

目次

まえがき.....(1)

はじめに——なぜ今、洪沢敬三なのか.....1

洪沢敬三の WHO'S HE.....1

『民具学のパイオニア』.....5

栄一と敬三、儒家と道家.....12

アチック・リバイバル.....19

第一章 学問の形成.....27

第一節 いかに生きるかの模索.....27

世界の拡大.....27

生物学的人生観の獲得.....30

ジョン・ラボックへの傾倒	35
学徒仙台での共同生活と旅	39
第二節 経済史的思考の確立	44
「地方学」からの系譜	44
ドイツ新歴史学派への関心	49
文化研究としての「工業」研究	52
アチック・ミューゼアムの萌芽	55
第二章 学問の萌芽	61
第一節 博物館的思考の形成	61
アチック・ミューゼアムの始動	61
博物館的思考の獲得	66
同時代のなかの民族学博物館	69

目次

同時代のなかの民俗博物館・野外博物館	73
同時代のなかの動物園・水族館・植物園	79
第二節 アチック・ミューゼウム・再起動	85
台湾・沖縄の旅から第一銀行入行へ	85
「蝨時代」としての郷土玩具時代	87
江戸趣味の考証と科学的方法のズレ	95
民俗学への傾倒	100
民具収集への展開	108
第三節 研究のコミュニティ形成	123
アチック黄金時代の幕開け	123
若い感性とチームワーク	127
研究のコミュニティの醸成	132
採訪旅行の諸形態と研究手法	148

第三章 学問の開花

第一節 民具研究の実像

足半研究の実験

「民具とは何か」との格闘

民俗学的な民具観

経済学的な民具観

民族学的な民具観

『民具蒐集調査要目』の策定

民族学博物館としての網羅的収集

戦後に刊行されたアチック・ミュージアムの民具研究の成果

第二節 漁業史研究の実像

内浦の再発見と漁民史料との出会い

漁業史研究に従事した同人たち

旅から得た海へのまなざし

163 163 174 180 183 189 202 210 214 214 221 229

目次

漁業史研究の事業化	233
漁業史研究の同時代的布置	242
戦後に刊行された祭魚洞文庫の漁業史研究の成果	248
第三節 項目調査と郵便の活用	259
アチック・ミューゼウムによる調査要目と通信調査	264
顧問・宮本勢助の山袴研究と通信調査	269
未完の筌研究と通信調査	288
鯨肉利用調査と通信調査	275
おわりに——渋沢敬三の学問の流儀と人文学のこれから	288
渋沢敬三の学問の流儀	297
戦後の成果刊行と『明治文化史』	304
渋沢敬三にまなぶ人文学のこれから	309

あとがき…………… 319

参考文献一覧…………… 325

アチック・ミュージアム刊行物一覧…………… 339

SAMPLE